

最近の心理学理論における宗教と死

—意味管理理論

イーリヤ・ムスリン

はじめに

本稿の主な目的は、意味管理理論における宗教概念と死の捉え方、また宗教と死の関係に関する考え方を分析し、この理論が宗教と死生学研究にもたらしうる貢献について考察を行うことである。その際、宗教の多様性を重視し、研究者自身の宗教概念を問いつながら自文化中心の態度に陥ることを警戒する宗教学的なアプローチ、そして死関連の心理的・社会的現象の多面性や複雑性を意識する死生学的な立場に基づいて議論を進める。

死や生命倫理に関する情報発信、教育、訓練などを通じて具体的な社会的貢献を目指す死生学は、新たな学際的学問分野として現在日本で組織化・体系化の過程にあり、その一つの目標として死と生に関する理論的な知識の蓄積や整理がかかげられている。本研究は、こうした潮流を念頭に置きながら、従来の宗教理論におけ

る死と宗教に関する捉え方を整理し、その上で批判的考察を提示することを目指すものである。

一 意味管理理論の概要

意味管理理論 (Meaning Management Theory) (以下、「MMT」とも) は、P・T・P・ウォングが提示し、G・T・レーカー、T・エリアソン、P・エバーソールなどの研究成果をも取り入れた実存主義的な動機付け理論である。主要な提唱者を務めるウォングは、高齢者、また癌やエイズの終末期患者の死の不安とそれに対する対処法、そしてより広く、人間の死に対する態度を長年研究してきた臨床心理学者であり、牧師でもある。この理論が上記の名称で登場するのは二〇〇五年であるが、V・フランクに示唆を受けつつ、六〇年代から続く北米心理学の意味研究の流れを汲んでおり、そのルーツは前掲の学者による八〇、九〇年代の研究の中に見られる。

ウォングによれば、意味管理理論の出発点は、人間が意味を追求し、意味を創造ないし構築したり、再構築したりする存在であるという人間観である。人間は生物学的・社会的・霊的な次元を持つ存在であり、その主要な目標は生存を確保し、自らの生存・存在の意味と理由を見出すことであるという。人間は社会的に構築され、共有される意味の世界の中に生きており、出来事や現象そのものではなく、むしろその意味に対して反応し世界を理解するために、常に積極的に意味を探索しようとする。フランクと同様、MMTはいかなる厳しい状況においても意味を見出すことが可能であり、苦しみや死にかかわらず幸福と希望を持ち続けるなら、意味が不可欠になると考える。つまり、我々が現実が付する意味は、死を含め、人生の様々な問題への対処に根本的な影響を与えるということである。

1 「意味」の意味と機能

M M T論者は、この理論が正式に命名される以前から意味・意義を定義し、個人においてそれを特定ないし測定しようとする努力をしている。例えば、レーカーとウォングは、個人の意味に関する理論を展開する中で、意味とは多次元的な構築物であり、それを理解するには、意味の構造的な分子（意味における認知的・情緒的・動機的な要素）、意味の内容あるいは源泉、人が意味を取得する対象の範囲、意味の深度という四つの次元を考慮する必要があると述べる。²⁾

またウォングは、人間が具体的な出来事や状況において求める「状況的意味」と、人生や宇宙の大きな意味である「究極の意味」を区別し、個人にとって意味の源泉となり得る七つの分野を特定する。それが、目標追求、親密関係と家族、共同体の中の関係、自己超越（自己より大きな大義）、宗教（霊性）、自己受容（成熟さ）、公平な扱い（正義と道徳）である。³⁾

意味の定義について、ウォングは初期の論文の中で次のように述べている。「個人的な意味とは、主観的な価値に基づく、個人によって構築された、その個人に意義や満足感を与えることのできる認知的システムのことである」⁴⁾。

続いて、意味の機能に関していえば、レーカーとウォングによると、個人的な意味は、人生経験の解釈を提供し、人間存在の矛盾、衝突、不条理さを統合させるように機能する。この議論においてウォングは、意味の不安緩和機能も主張する。すなわち、意味こそネガティブな経験をポジティブなものに塗り替えることが可能にするが、そうすることによって意味は生と死の恐ろしさに対して最良の保護を提供する。そこでは、人は意味の創造によって、困難を乗り越え、活気のある充実した生産的な人生を生きるのに必要なエネルギーを取得することができる。あるいは、個人的な意味が人生に対する大きな満足感の源泉となり、ストレスに対する緩衝

になるというように、意味が充実感や良好な精神的健康、円滑な老化過程及び幸福の条件として見なされる。

ここで指摘すべきは、MMTが意味を考える際、意味の源泉や機能のみならず、その道徳的な性質をも検討し、意義・意味の深淺と真偽に関しても発言していることである。実際、レーカーとウォングは一九八八年の論文において、人生の意義とは何かという問いは、生きる価値のある人生とは何か、もしくは、人生の目的とは何かと言い換えられるが、これらの問いは価値判断を要すると明記する。そして「個人的意味のレベル」という概念を導入し、完全な意味の充足は自己超越においてのみ可能であるというフランクルの考えを採用しながら、意味の階層性を主張する。それによると、意味の最も低いレベルは、快感や快適の中に意味を見出す自己中心的な快樂主義である。次に来る高いレベルが、自分の自己実現や創造性、個人的な成長を価値ある人生目標として見なす立場であり、それよりさらに高いレベルが、個人的な利益を超える他者への奉仕や社会的あるいは政治的大義への献身となる。最も高い意味のレベルでは、個人は自己を超越し、「宇宙の意味」と「究極的目的」を含む価値を取り入れる。そしてこうした意味の階級が、個人の意味の深度を判断するための基準を提供するという。その際ウォングは、ヨーロッパの征服やユダヤ人絶滅を目指したヒトラーでさえそのような政策を通して何らかの意味を求めていたのではないかという見方に対しては、「真の人生の意義は時代を超える普遍的な価値に基づくものでなければならぬ」と考えたフランクルの立場をそのまま継承する」と明確に自らの立場を示している。¹⁰

実際ウォングは、意味の尺度の開発を目標とした研究を詳述する論稿において、人生の意義に関する四つの意識調査によって、「比較的に客観的な意義の準拠枠」を作ることができたと主張する。それによれば、フランクルを含めて従来の研究は、意味の捉え方において大きな個人差を想定するが、自身が開発した（先述の七つの意味の源泉から成る）「個人意味プロフィール」という尺度には、理想的な意味のプロトタイプ的な構造、

つまり、有意義な人生を築き上げるための設計図のような普遍的な意味のパターンが含まれるとしている。¹¹

このようにウォングは、意味を相対的で主観的なものとして捉える従来の研究と異なり、相対性と主観性の克服を可能にするような、意味に関する客観的な事実を特定することができたと断言する。大勢の回答者の意味概念を捉えた尺度を用いることで、理想的とされる人生の特徴が明らかに、個々人の人生をその尺度と対比させれば、その人が有意義な人生を送っているかどうかの判断が可能になるというわけである。¹²

2 「意味管理」が意味すること

意味管理という概念に関して、ウォングは、*management*（「管理・経営」）という語は、ビジネスにおいては企業の目標達成のための資源管理を意味するが、人生に関していえば、人生の目標を成し遂げるのに必要な内面的・外面的資源を管理することを意味すると述べる。このように、「意味管理」とは、意味・意義を通して人生を管理することを指すのであり、具体的には、自分は誰か（アイデンティティ）、最も大切に行っているのは何か（価値）、どこに向かっているのか（目的）、死や苦しみにもかかわらず良い人生が生きられるのか（幸福）などの理解を目標とする、意味の探求・創造・再構築の管理を意味すると考えられている。¹³

二 MMTにおける宗教

1 宗教の特性と機能

宗教を取り上げた近年の論文の中でウォングは、宗教が人類の長い歴史を通して存在し続けたことは、宗教自体が適応的機能を果たしてきたことの証拠であるという見解に賛同し、「人間本性の中に根を持つからこそ、

宗教は人間存在において最も強力な力の一つであり続けている」と述べた。宗教に「人間存在における中心的な役割」を認めながら、ウォングはさらに次のように述べる。「すべての人の（心の）深いところには聖なるもの、超越的なものとの繋がりにへの憧れがある。個人の中には、孤児のように親・自分の運命・家を求めることを促す空虚感と不安がある。人々は、例えその意識がなくても、自信と勇気を持って未知と向き合うことができるように必死かつ密かに神を信じたがっているのである」¹⁴。

このようにウォングは、フランクフルンに類似した形で、自己超越性を中心とする、無意識で普遍的な宗教心・宗教性を想定する。宗教の普遍性を裏付ける見解に関しては、キリスト教神学者の見方が引用される。「神の姿に似せて作られた人間の人生全体は創造主への奉仕を反映しなければならぬ。人間は自らの神への奉仕の外に存在し得ず、人は、真の神に仕えるにしても、偶像あるいは自らに仕えるにしても、仕える以外は道がない。宗教は人間を定義し、宗教こそ人間創造の理由であり、人間の満たすべき目的である」¹⁵。

また、先の論文では、フランクフルンと同様に、人間を肉体的（生物学的）・心理学的・霊的次元を有する存在として捉える人間観が展開される。意味への追求と（大文字で始まる単数形としての）神を求め、神を知ろうとする指向性を霊的な次元に属するものとして挙げつつ、「宗教は、神を求め、神を知りたいという先天的な能力と欲求を備える人間が霊的存在であることの必然的な表れである」¹⁶とも述べる。

さらに、従来の宗教定義に関する短い考察では、W・ジェームズやP・テイリツヒ、G・W・オルポットなどの宗教の捉え方を取り上げ、それらに賛同する形で議論を進める。宗教を、自分と神的なものとの関係の中で理解し、個人の孤独における感情・行為・経験として捉えたジェームズの見解、それから、宇宙及び人間の最終的原因と究極の目標に関する超自然的・神秘的・畏怖的なものへの個人的信仰、価値、行動として宗教を理解するD・O・モバークの定義が引用される。どちらの定義においても宗教は個人の営みとして限定的に捉

えられる。

これら複数の宗教定義の考察を踏まえ、ウォングは次のように結論づけている。宗教とはただの抽象的な観念や儀礼的実践の寄せ集めではなく、むしろ、日常の生活における人々の道徳的判断や選択に影響を及ぼし、人々の生き方と死に方に影響を与えるだけの具体性を持つ重要な存在であり、人々の霊的・実存的な欲求を満たすものである。さらに宗教の機能としては、人間の人生に首尾一貫した感覚や希望、意味をもたらし、日常生活の退屈さを超越することを可能にする。共有された信仰と儀礼の体系としての宗教は、(社会的なレベルでは)人々に共同体としての感覚(一体感)をも与える。宗教と意味・意義の關係に言えば、人生に意義を提供することが宗教の重要な役割であり、宗教は、特定の出来事や価値を、究極の意味という大きな枠組みの中に据えることによってそれらの理解を可能にするという。

2 宗教の重要性

ウォングの議論では、宗教を意味源泉として捉えた書物や宗教の精神的健康へのポジティブな効果を示した調査が多数挙げられ、宗教が大きな意味の源泉で、禍や実存的な問題への効果的な対処戦略として高く評価される。なぜなら、宗教は人々に究極の意味を与えることによって、苦しみなどの特定の出来事や状況の意味付けを可能にするほか、自尊心やアイデンティティを養う機会、他者との団結感や親近感をも提供するため、悩みや不安の克服・緩衝に繋がるためである。また重病や大切な他者の喪失に対する効果的な対処法を提示することによって、高齢者・終末期患者・遺族などをより良い精神的健康と充実した生活へ促すことができる。¹⁷⁾

そのような宗教は、犯罪やアルコール中毒、麻薬依存症、性病の予防にも資するため、国家の犯罪防止と医療への出費を抑えるなど、国家と社会にとって経済的にも有用となる。ウォングは、(アメリカ)国家は宗教

に対する考え方を変え、宗教の精神的・肉体的健康への効果に関する研究を金銭的に支援し、高齢者の精神ケアなどの分野における政府機関と宗教団体の協力を推進すべきだとも述べている。¹⁸

三 MMTにおける死

1 恐怖管理理論への批判

ここまで見てきたMMTの視点と立場は、社会心理学の分野において今日大きな影響力を誇る恐怖管理理論(TMT)¹⁹(意味管理理論と同様、自らを実存主義心理学の流れに位置付けている)と対照的に紹介され、説明される。ウォングによると、MMTは、TMTと同様、将来を考えることができ、自らの死を予測できる人間の認知能力・思考力を死の不安の源として捉える。死が人間の生・生き方に影響を与えるがゆえ、人が死に対して自らの人生の意義を詰問することもあり、このことは死の不安にさらなる次元を加えると考えられる。

しかし、ウォング他によると、人々が最も頻繁に挙げる実存的な問いとは、TMTの問題提起において中心的な位置を占める「死への大恐怖をどう回避できるか」ではなく、「死と生への大恐怖にもかかわらず、どのように意味と目的を見出すことができるか」である。つまり、MMTによれば、多くの人々にとって最大の関心は、何のために生き、何のために死ぬか、自分はどうような生き方をすべきか、残りの時間をどう過ごすべきか、どのようにして満足のいく充実した人生が送れるかである。我々は確かに死の不安を完全に除去することができないが、それでも年齢や経験、状況によって死に対する態度が変化し、その態度は必ずしも不安・恐怖もしくは防衛に限られるものではない。我々人間が心理的な課題として抱えているのは、死の不安や大切な他者の損失に対してどのように自己を守るか(死の恐怖・不安の管理をいかに行うか)という側面のみならず、

いかに有意義で豊かな人生を送れるか（死の意味をいかに管理できるか）という点である。²¹ にもかかわらず、TMTの議論は、死の回避（否認）が人間の最も強力で、一次的な動機であるという前提の上に成り立っており、またそうであるがゆえに、意味追求は、死の大恐怖によって発動する二次的な動機として位置付けられてしまう。だが、そのようなTMTに対してMMTは、意味追求を普遍的で一次的な人間動機として捉えたフランクルの見方を支持する立場を取る。²²

また死に対する態度に関してウォングは、TMTが重視する否認のような回避型態度のほかに、死と向き合う姿勢、すなわち死の受容という態度も起こり得ると強調する。特定の条件の中で死を受け入れようとする考え方が個人の主要な動機になり得る場合もあり、それを示す臨床的・実証的証拠は増えていくとする。死に対する態度を一義的に回避として捉えるTMTとは異なり、MMTは死の受容も考慮に入れるわけである。

2 死に対する態度

MMTが関心を寄せる死の受容は、次のように区分される。①来世を現世より良い世界として見なす信仰を持つ人に見られるような、死を前向きに捉え、積極的に歓迎する態度（接近型受容）、②死を、生と死からなる自然な周期の一部として受け入れる態度（中立型受容）、③生が苦痛に満ちていると捉え、死をそうした苦痛からの解放と見なして受け入れる態度（逃避型受容）、の三つである。²³

ウォング他は、死の受容以外に、死の恐怖と死の回避という「ネガティブな態度」も想定している。死の恐怖は、人が死に直面した時に感じる意識的な恐怖であるのに対し、死の回避は、死について考え、話すことを避けることによつて死を意識から追い出そうとする防衛的な態度である。²⁴ 死の回避は、基本的に、死または死すべき運命を否認する姿勢であり、これは死のタブー化、アルコール中毒などの陶酔、整形や化粧品使用など

の青春期の延長を旨指す行動などを通じて現れる。²⁵

ウォングらの見解では、死の恐怖は普遍的であり、様々な次元や顕現の形を持つ複合的なものである。死の恐怖の中には、自己消滅や死後の不確実性、贖罪や救済の機会の喪失、死にゆく者の、遺族の将来に関する恐怖などが含まれる。²⁶ウォングらの別の著作では、死の恐怖の諸次元として、死にゆく時の苦痛、他者からの分離、死後の神による処罰、達成したい目標や使命を成し遂げぬうちに死を迎えるかもしれないという恐怖も挙げられている。このほか、有意義な人生を送るのに失敗したという感覚がもたらす死への恐怖、つまり、意義・意味の欠如による死の恐怖も存在する。これら死の恐怖は、最も強力で最も普遍的な死に対する態度であり、死の回避及び三つの死の受容は、死の恐怖と不安に対処しようとする試みであるとも考えられる。¹⁷

とはいえ、MMT論者は、死の不安・恐怖のみを研究対象とするアメリカ心理学の従来の研究動向に批判的であり、死の不安・恐怖にしても、死に対する態度のより広い文脈の中に据えて考察することを主張する。²⁸我々の死に対する反応を恐怖に還元すべきではなく、死の心理学は、恐怖と否認を超え、死に対するポジティブな態度を研究対象にすべきであるという。²⁹ウォングは、TMTの死の不安に関する結論が豊富な経験的研究に支えられているとはいえ、TMTが人間の死に対する態度すべてを捉えているとは言いがたいと述べる。TMT論者においては、文化（世界観）と自尊心が、死に関連する刺激によつて生じる死の恐怖に対する緩衝または解毒剤として機能すると主張されるが、死を恐れずに受け入れる人も存在し、その中には死を生より望ましいと考える逃避型受容の人も存在する。そうした人々にとつて、死関連の刺激は、文化的世界観ないし自尊心のような防衛機制的稼働をもたらすというより、むしろ自殺に繋がりやすい。また、充実した人生を送り、後悔なく冷静に死を受け入れた接近型受容であるなら、死関連の刺激が防衛的な思考や行動を引き起こすとは考えられず、死を自然な現象として受け入れている中立型受容にしても、同様の刺激は、自分の潜在能力を実現

したい、あるいは自分の使命を全うしたいという（ポジティブな）反応を招くはずであるとしている。³⁰

さらにウォングによれば、死の恐怖は最も克服しにくい恐怖であり、否認や合理化などの防衛機制がそれに完全に対応しようとは言えない。MMTの主たるメッセージは、防衛機制の重要性を認めつつ、「活発で有意義な人生をどのように送ることができるといふ点に専念することが、死の不安から自分を守る最も効果的な方法である」という点にある。またウォング他は、充実した、有意義な人生を送ったと感じる調査の対象者が、他の者より少ない死の恐怖・不安を示すことを明らかにした先行研究を引き合いに出し、（自らが唱える）実存主義的な主張が経験的に証明されているとする。これはつまり、人生の再考ないし見直し（意味の再構築）を行う中で、人生において何らかの意義を見出すことができたか否かによって、死に対して恐怖を抱くか、それとも死を受け入れるかという死に対する態度が決まるといふ考えであり、死に対する態度は意味追求と関係しているということである。またそれ故に、生き残り、そして死と向き合うためには意味感が必要であるとされる。そうした実存主義的な見方は、多様な死に対する態度の統合を可能にする枠組みを提供する。³¹ 死の恐怖を管理する上で特に有効な心理的メカニズムについて議論する際にも、意味感と目的感こそ、統制感や自己効力感などのような心理的な感覚よりも、死の恐怖や様々な生の中の恐怖に対して最も有効な保護を与え、最大限に癒しと幸福に繋がらうるものであると指摘される。³²

このようにMMTでは、意味ないし意味感をもつ死の恐怖に対する緩衝としての優越性が繰り返し主張される。意味感をもたらす死の恐怖の緩和は、無意識の領域でも（死に対するネガティブな考えをポジティブな考えに意図的に塗り替えられる）意識のレベルでも行われるという。³⁴ そしてMMTは、信仰と霊性を深め、人生の意義と目的のよりよい理解に繋がるものとして、生を歓迎する姿勢、つまり身体的状態や現在の状況に関係なく生きることに積極的に従事することを勧める。MMTこそ、死の受け入れと有意義な生き方を可能にする

観念的枠組みと指針を提供するというわけである。³⁵

3 死に対する態度と生き方の関係

この点に関してウォングは、充実した生産的な人生を送るには、死の恐怖から身を守ることも、死と積極的に向かい合ってそれを受け入れる態度もどちらも必要不可欠であるとする。死に対する防衛的な姿勢と、死に対して意味を追求し創造する姿勢は、実際相互作用している。ゆえに、死に対して「良き人生を達成するために」必要な対処法としては、回避型と接近型の双方のアプローチを用いることが勧められる。具体的には、回避型対処法は、死に対して自己保存を目指し、安全感を求める傾向、つまり肉体的・心理的な統合性を保護するために、無意識的・意識的な防衛機制を利用するアプローチである。一方、接近型対処法とは、キャリアでの成功を成し遂げたい、健康で幸せな子供を育てたい、世界を良い方向に変えたいなどのような、本人が価値あると見なす人生目標を追求しようとする姿勢であり、人生において愉快で楽しい瞬間を求め、そうした瞬間を作り出そうとする。

前者の回避型は、死の不安に追われ、リスクを冒すことを恐れるため、自らの行動の範囲を制限し、充足度に比較的乏しい人生を送る傾向がある。一方、接近型の姿勢は、困難な仕事に挑戦し、自らの命を危険に晒してまで自分の使命もしくは価値あると見なす人生目標を達成しようとするため、その分より充実した人生を送る可能性がある。ウォングにならえば、死の恐怖が希望や意味、生きがいによって解消されるのは、この後者のタイプの人間である。死に対する防衛機制には、否認、回避、文化的世界観、自尊心などがあるが、MMTは防衛ではなく、精神的成長を重視し、人生の意義・意味の成就の可能性に主な関心を置く。死関連の刺激によって防衛機制が作動するのは「死の指向性」をもつ人間においてであり、意味に満ちた独自の活発な人生を

送ることに専念している「成長の指向性」をもつ者にとつて、死は大きな関心事にはならないという。³⁶

上述の内容が示唆するように、主に無意識に注目するTMTに対し、MMTでは、人間の意志力と死に対する意識的な態度・判断が強調される。例えばウォングが、MMTにおいて我々は、死に恐怖を持って、もしくは希望を持って臨むことができると述べたように、生を意識するか死を意識するかという選択肢がある中で、どちらを選ぶかは我々次第であると見なされる。反面、TMTの問題点の一つは、死の脅威に対して、残された時間を有効に活用し、夢を実現しようとする決意を新たにした人の心境を、人生の目標の成就という意識的な判断としてではなく、死の恐怖に対する無意識な防衛として解釈してしまいがちであることである。³⁸

死を受け入れ、また理解することによつて何らかの知恵を得るという点を踏まえ、ウォングは、死そのものを巨大な恐怖の源としてではなく、巨匠と見なすべきであると、死に対する特定の態度を勧める。³⁹ というのも、死は我々の精神を集中させ、意識を明確にし、人生において何が重要であるかを教えてくれるからである。⁴⁰ ゆえに、MMTはポジティブな実存心理学及び実存精神医療法における新たな展開であり、死に対してTMTよりも前向きな見方を提示するほか、終末期患者の意味模索を手助けすることが可能であり、臨床的にTMTよりも有用な視点を提供し得るとウォングは主張する。⁴¹

4 宗教と死

ウォングは、積極的な自己実現によつて得られる人生に対する充実感と達成感を持つ死の不安に対する緩和機能に注目したL・M・グッドマンの議論⁴²に基づき、TMTが自己実現を無視しているといった批判を展開する。だがその一方で、自己実現、あるいは自己の潜在能力の実現を強調する立場の限界にも触れている。自己実現こそ死に対する最善の対処法であるというグッドマンの見方は、一部の人々が早期の死によつて自らの人

生の任務・使命を果たすことなく、潜在能力を発揮できないまま亡くなる点を見落としている。加えて、この見方は死後に対する希望を持ち合わせていない。ウォングは、死へのアプローチとして最大限の満足をもたらすのは、自己の生前の使命だけでなく、報いのある死後の生、すなわち再生と永遠の命をも想定する接近型受容の態度である、と主張する。生の意味感のみならず、死の意味感とも相関関係を持つ点でも、接近型態度は死への最良の態度であり、「宗教に基づいた死の受容」は死に対する「勝利の精神」を備える。レーカーとウォングは、その初期の論文においても、宗教的信仰を持つ高齢者が、信仰を持たない高齢者と比して、死への恐怖が少ないという結果を示す先行研究を受けて、「不死、天国の存在と究極の意味を含む宗教的信仰は、死の不安に対する効果的な解毒剤である」と述べる。⁴⁴

四 本稿における評価

ここまで述べたように、意味管理理論は、宗教の背景にある動機、宗教の機能、または宗教と精神的健康の関係という学問的に重要な問題を取り上げ、説明しようとする。またそれに留まらず、意味を中心に、心理学と宗教は現代社会にどのような手助けが可能かという具体的な社会的貢献も視野に入れる。ここで社会的貢献とは、苦しみをどのように受け入れ、それを充実した生き方ないし有意義な死に方にどう繋げていくかという観点から、死・病・大切な他者との死別に対する態度の変容を、著作を通して、あるいは病院やホスピスなどの臨床の場で直接勧めることにある。

死に関して言えば、MMTは、死の恐怖・不安を多次元的、多面的な現象として捉えており、自己や他者の死と死の恐怖への対処法を検討する際に、他理論では軽視されがちな意味と意識的態度の重要性を提示する。

恐怖管理理論が死の不安・恐怖とそれに対する無意識な防衛を強調し過ぎるあまり、不安以外の死に対する態度を見過ごし、人間そのものを無意識な恐怖に左右される消極的で無力な存在に還元しがちで、反証不可能にさえ陥っているとするMMTの指摘は、問題の核心を突いており、貴重な学問的な貢献であると言える。また、大切な他者を喪失したり、重病によって死に至る途上にあつたり、高齢のために死が近づいているなどのような実存的な悩みを抱える人々に対し、MMTがその対処方法について助言を提供することは、この理論が学問自体への貢献以外に、純粋な理論的な考察を超えて、広く社会的な意義を伴った実践に携わっていることを表している。

しかしながら、そのような意味管理理論にもいくつかの問題点や限界が見受けられ、それらを指摘しておく必要はあろう。

まず、MMTの中心的な概念である意味の定義の困難さ、あるいはその恣意性である。「意味」を定義しようとする事自体が何か既存の意味の適用を伴うという点は触れておかねばならない。ウォングは複数の意識調査を通して作成した尺度をもとに意味の客観化を試みているが、調査が対象とするのは、あくまで当該文化圏に属する地域の回答者による意味の概念である。それが多文化・他集団・異なる時代にも適応し得ると考えられるだけの必然性と普遍性を有しておらず、すべての人間が共有できるような、意義ある人生の客観的な基盤が存在することの証明は難しい。

意味の定義と関連して、この理論の社会的な貢献に向けた取り組みと直結する問題点は、研究者自身の生き方や死についての立場をめぐる理想・嗜好が、研究に強く反映され、それら自体が目指すべき意味と実存的問題の解決方法として勧められることである。それは、ウォングなどが示唆する、意味や達成に満ちた生産的な「良き人生」の観念や意味の階級、他者への奉仕の勧めなどに見られる。この点に関しては、MMTが宗教の

必要性と普遍性を訴える際、人間存在の理由と意味を創造主への奉仕に見出し、創造主への奉仕を望まれる生き方として評価しながら、他の宗教形態を偶像崇拜に格下げするといった、規範的で、ある意味露骨なキリスト教神学の視点を導入していることも挙げておきたい。

この価値判断の問題は、単に牧師であるウォング自身の信仰や所属、あるいは個人的な世界観と理想のみによるものではないだろう。というのも、意味追求が幸福や精神的充足と健康にポジティブな効果をもたらすことを確かめようとする研究は、必然的に、具体的にどのような意味がそうした効果をもたらすのか、あるいは何らかの病的な意味追求があるのか否かという問題に直面せざるを得ない。そのため、結局のところ、意味の深淺と道徳性に関する判断を行わざるを得ないという内在的な問題を抱える。例えば、意味を扱ったP・エバーソールは次のように述べる。「人が人生の意義を深く感じるからといって、そのこと自体がポジティブな成果だとは限らない。(中略)より詳細な分析を可能にするためには、意義深度の測定法に意義の道徳性を測る測定手段を加え、それらを有益に併用する必要がある⁴⁵」。

加えて、MMTの中核をなすウォングの単著では、意味追求は良好な精神的状態や健康に繋がるものとして一義的にポジティブに捉えられているように思われる。だが、R・F・パウマイスターが指摘するように、意味追求が病的なものに発展してしまう場合もある。すなわち、宇宙や人生のすべての側面と状況に「高次な意味」を過剰に期待したり、人の気まぐれや偶然・偶発を誤って何らかの深い意味を持つものとして捉えたりする傾向も否定できず、またそれは、「意味中毒」あるいは「意味依存症」のような状態を招きかねない。例えば、自爆テロのような自己犠牲や宗教的な殉教は、死に過剰に意味を付与する傾向（宗教における高次な意味に関する神話）の表れであり、場合によっては意味探求をやめ、無意味な物事と事柄が起こり得ることも率直に受け止めねばならない。パウマイスターによるこの指摘は、ウォングも関わる共著では取り上げられて

いるものの、他のMMTの論文では忘れ去られている。⁴⁶

さらに宗教に関して言えば、MMTは、未知の世界を前にして孤児のように親を求め、無意識にまた必死に(単数形の)神を信じようとする気持ち人を人類共通の心の深層として想定する。ここには、被造物の無力感と唯一神への依存感を主張するキリスト教神学、またフランクフルトによる無意識の有神論が色濃く反映されていると言える。また単数形の神を知ろうとする欲求を人間の先天的な要求として捉えていることは、宗教の多様性を理解し、一神教圏を超える範囲と有効性を持つ宗教理論を目指す上では、有用なアプローチであるとは言いがたい。神的なものと個人の遭遇を強調している点にも、カナダの牧師であるウォング自身による、北米プロテスタント的な個人宗教を重視する価値観が表れている。実際、苦しみに遭遇した際に「宗教」が意味源泉としてもつ機能ないし有効性についてのウォングの議論も、キリスト教の意味源泉としての有効性を説明するに留まっている。「健康を含めて、すべてを失った時でさえ、(訳注・大文字で始まる単数形の)神へ手を差し伸ばす」という霊的な能力は、無意味感と絶望と闘う上で効果的な武器であり続ける⁴⁷。というウォングの言葉のように、特定の価値を提唱することによって、MMTの宗教論は自文化中心的な議論に陥りがちであり、その説明範囲も限定されてしまっていると言える。

特定の宗教信仰への偏りは、MMTによる死に対する態度の研究においても見られる。ウォングらが作成した「死に対する態度のプロフィール——改訂版——」の中で、死への接近型態度の評価基準となる項目は、すべて来世や死後の魂の再生に関するものである。⁴⁸ ここには、無宗教の人間、あるいは、死は生であり生は死であるというような道教と日本の禅の思想に見られる概念を持つ者は、死を積極的に受け入れられない、というような微妙な意味合いが暗に内包されていると考えられなくもない。尺度の使用対象として北米社会のみが想定されていたとしても、その社会には複数の民族や宗教が存在する。死の概念に関しても、多様性を予測し、

東洋の宗教も考慮に入れながら、一神教的な信仰以外の項目を設けるべきだろう。

本稿では、正しい生き方や真の意味などといった表現によって提示されるある種の価値判断は、特定の宗教の真偽や良し悪し悪しに関する判断を含み、特定の宗教の勧めに繋がりがかねないものとして控えるべきだと考える。特定の宗教の真偽や価値についての判断は、宗教学ではなく、むしろ神学・宗学など、宗教者による教理の弁論と推奨の領域にあると見るためである。価値判断の完全な排除がそもそも不可能であり、非現実的、あるいは望ましくないとしても、少なくとも学問的な手続きとしては、自らの価値観をできるだけ自覚し、議論を始める際にはそれを明記すべきであろう。普遍的な有用性を追求する野心とは別に、死と生と宗教をめぐる自らの議論が、ある特定の立場からの何らかの貢献を目指すものであることに言及するのは可能ではなくて、M M Tにそうした姿勢は見られない。

また、グッドマンの自己実現と死に関する説を「死後に対して希望を持たせない」とする批判は不当であるように思える。確かに、死に直面する重病の患者や高齢者は、その心のケアあるいは終末期ケアの一環として慰められる必要があり、カウンセラーが臨床の場で信仰を持つ者の世界観を肯定する場合もあるだろう。だが、その点を考慮しても、学術的な理論を形成する際には、理論が事実を支えられ、データに裏付けられているかを重視すべきであり、ある宗教の死後に関する教え（来世・死後の再生）を支持するかのよう受け取り得る見解まで言及する必要はなからう。

これまで見てきたように、M M Tは宗教による精神的健康や幸福といったポジティブな効果を強調する。だがその際、こうした見解に適合しないような研究結果にはあまり目が向けられない。具体的には、例えばM M Tは、他人への奉仕などといった自己超越を勧め、来世や神への信仰を、死などの実存的大問題に対して最良の保護を提供するものとして一義的に捉えているようである。だが、信仰を持つホスピスの介護者を対象とし

たJ・R・ミクラーらの研究は、仕事の辛さを理由に介護者が自らの仕事を神の罰と見なし、幸福感の欠如に悩んでいる事例を報告する。⁴⁹ C・G・アノとE・B・ヴァスコセレスは、重病や近親者の死を経験した信者が神の能力や善意を深く疑い、神に対して怒りや失望を抱くとともに、自己の価値に関しても不安に陥り、鬱病や虚脱状態になったことを示す結果を発表している。⁵⁰ つまり、宗教的信仰そのものが意味の危機を引き起こし、またそれを深める場合も見受けられるのである。

MMTが議論の土台とした恐怖管理理論への批判について見れば、ウォングは、死の恐怖を全ての人の無意識の領域に常に存在し、働くものとして捉えるTMTの主張を退け、死に対する意識的な判断の可能性と重要性を論じた。その際、死を積極的にまたは中立的に受け入れた接近型受容と中立型受容の人々にとって、死は防衛機制の稼働にあまり結びつかず、このタイプは生きることと専念するために、死をあまり不安に思わない。あるいは関心事としないといった点が主張される。だが、TMTが多数の調査と実験を通して集積した、世界観と自尊心の死の恐怖に対する緩衝の機能についての証拠は実に膨大であり、またそこでは防衛機制の働きがそもそも無意識として位置付けられる。そのため、いくら意識的に死に関心を置かない人がいる、あるいは意識のレベルで死を恐れずに意図的に意味を追求する人がいると指摘したとしても、その事実だけでTMTの議論を崩すのは難しい。反論をより確実にするには、社会心理的実験も視野に入れた、より丁寧かつ慎重な議論が求められるだろう。

五 結論

以上のように、MMTは、宗教の背景にある個人の動機、意味の提供者としての宗教の機能、宗教の精神的

健康への影響に関する議論を展開する。中でもとりわけ、近年他の理論では見落とされがちな、生と死の意義や生と死に対する意識的な判断の役割を強調するなどして、宗教者が求める意味と、彼らの意志、意識的行動という宗教の重要な次元にしかるべき注意を呼び戻そうとしている。また、死に対する態度をきわめて多面的な現象として捉え、その様々な側面を検討するとともに、恐怖管理理論についての批判的な指摘を通じて、死関連の諸問題の理論的整理と理解に貢献する。フランクフルが提示した基本路線を下敷きにしつつ、理論の検討以外に精神療法の領域にも議論を広げ、病院やホスピスなど、臨床の場における理論の応用に力を注いでいる。

しかし、このような理論的發展と社会的貢献を試みるMMTには、個人の経験を宗教の本質と見なし、唯一神を知ろうとする欲求を普遍的な人間心理として捉える傾向が散見される。そのため、プロテスタント的な価値観と宗教観を色濃く反映した自文化中心主義に陥りがちであり、人生の真の意義や良き生き方、死との向き合い方に関する規範を設け、それを研究者や一般の読者にさえ勧めようとする。こうした特定の価値観を奨励し規範性を内包することは、MMTの有効範囲を狭め、議論の必然性や規範性の抑制などについての学術的な基準を減じさせているように思われる。というのも、神を信じようとすることを先天的な普遍的欲求として捉えてしまっているウォングの宗教論は、論理的な必然性が低く、宗教の多様性を示唆する文化人類学の研究成果を念頭に置く姿勢も弱い。また、宗教について議論を行う際、自らの宗教的な立場を最初に明記することは、近年の学術的な標準となつているが、ウォングはこの点でも逸脱する。

以上を踏まえるなら、MMTにはある種の疑似科学的な側面が見受けられ、その一部は、学問的な宗教心理学というより、あたかも宗教のための心理学、あるいは「牧師心理学」に留まつてしまつていくかのようである。それは、唯一神への信仰を人間の普遍的な欲求として捉えること、死の不安への対策として来世への信仰を勧めること、またMMT論者が所屬する教会の信念・宗教観を掲げること自体が、必ずしも問題を孕むとい

う意味ではない。実際、MMTは、死や重病などを考察する人生哲学としての意義を持ち合わせており、特にキリスト教圏においては、終末期患者や遺族、高齢者などの精神ケアという点で臨床的な価値も備えていようにもかかわらず、上記のような主張や推奨を含むMMTの議論が、学術的な心理学の論集や専門誌に掲載されることについては、一考の余地があるように思われる。

学術的な理論としての完成度を念頭に置けなく、意味(再)構築における信仰の重要性や意味の精神的健康と幸福へのポジティブな影響を主張するばかりでなく、信仰による意味の危機や「意味依存症」のようなネガティブな側面を指摘し、MMTの見解を反証する研究にも議論を向けるべきである。同時に、MMTの言説に見られる宗教的な色彩は少なくとも薄められる必要があるであろう。

■註

- 1 Wong, P. T. P., Meaning Management Theory and Death Acceptance. In Tomer, A., Eliason, G. T. and P. T. P. Wong (eds.), *Existential and Spiritual Issues in Death Attitudes* (pp. 65-87). New York: Lawrence Erlbaum Associates, 2008, pp. 72-73.
- 2 Reker, G. T. and Wong P.T.P., Aging as an Individual Process: Toward a Theory of Personal Meaning. In Birren, J. E. and V. L. Bengston (eds.), *Emergent Theories of Aging* (pp. 214-246). New York: Springer, 1988.
- 3 Wong, P. T. P., Meaning-centered counseling. In Wong P. T. P. and P. S. Fry (eds.), *The Human Quest for Meaning: A Handbook of Psychological Research and Clinical Applications* (pp. 395-435). Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates, 1998a.
- 4 Wong, P. T. P., Personal Meaning and Successful Aging. *Canadian Psychology*, 30 (3), 1989, p. 516.
- 5 Reker and Wong, op. cit., 1988, p. 223.
- 6 Wong, op. cit., 2008, p. 80.

- 7 Wong, op. cit., 1989, p. 522.
- 8 Reker and Wong, op. cit., 1988, p. 220.
- 9 *ibid.*, p. 226.
- 10 Wong, op. cit., 2008, p. 74.
- 11 Wong, P. T. P., Implicit Theories of Meaningful Life and the Development of the Personal Meaning Profile. In Wong, P. T. P. and Fry P. S. (eds.), *The Quest for Human Meaning: A Handbook of Psychological Research and Clinical Applications* (pp. 111-140), Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates, 1998b.
- 12 *ibid.*, pp. 130-131.
- 13 Wong, op. cit., 2008, p. 70.
- 14 Wong, P. T. P., Spirituality, Meaning, and Successful Aging. In Wong, P. T. P. and P. S. Fry (eds.), *The Human Quest for Meaning: A Handbook of Psychological Research and Clinical Applications* (pp. 359-394), Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates, 1998c, p. 361.
- 15 *ibid.*, pp. 361-362.
- 16 *ibid.*, p. 366.
- 17 *ibid.*, pp. 368-380.
- 18 *ibid.*, pp. 388-389.
- 19 TMTの詳細はムスリン・イーリヤ「恐怖管理理論における死と宗教——宗教は死の不安の緩衝なのか——」『死生学研究』一五号、二〇一一年、三七〜五五頁参照。
- 20 Wong, P. T. P., *The Challenges of Experimental Existential Psychology: Terror Management or Meaning Management? A Book Review of Handbook of Experimental Existential Psychology, PsycCritique (Contemporary Psychology: APA Review of Books)*, 2005, URL: <http://www.psycinfo.com/psycritiques> (二〇〇九年一月一四日アクセス)。
- 21 Wong, op. cit., 2008, p. 65, 69.
- 22 Wong, op. cit., 2005.

- 23 Wong, P. T. P., Meaning Making and the Positive Psychology of Death Acceptance. *International Journal of Existential Psychology and Psychotherapy*, 3 (2), 2010 235
- Wong, P. T. P., Reker, G. T. and Gesser, T., Death Attitude Profile-Revised: A Multidimensional Measure of Attitudes towards Death. In Neimeyer, R. A. (ed.), *Death Anxiety Handbook: Research, Instrumentation, and Application* (pp. 121-148), Washington, DC: Tylor and Francis, 1994.
- 24 *ibid.*, p. 134.
- 25 Wong, P. T. P., Meaning of Life and Meaning of Death in Successful Aging. In Tomer, A. (ed.), *Death Attitudes and the Older Adult: Theories, Concepts and Applications* (pp. 23-35), Philadelphia: Brunner-Routledge, 2000, pp. 28-29.
- 26 Wong, Reker and Gesser, op. cit. 1994, p. 122.
- 27 Wong, P. T. P., op. cit., 2008, pp. 67-68.
- 28 *ibid.*
- 29 Wong, P. T. P. and Tomer, A., Beyond Terror and Denial: The Positive Psychology of Death Acceptance, *Death Studies*, 35, 2011, p. 100.
- 30 Wong, op. cit., 2008, p. 79.
- 31 Wong, op. cit., 2008, p. 77.
- 32 Wong, Reker and Gesser, op. cit., 1994, p. 141.
- 33 *ibid.*, p. 72.
- 34 Wong, op. cit., 2008, p. 80.
- 35 *ibid.*, p. 78.
- 36 Wong, op. cit., 2008, p. 83.
- 37 *ibid.*, p. 78.
- 38 *ibid.*, p. 80.
- 39 *ibid.*, p. 78.

- 40 Wong and Tomer, op. cit., 2011, p. 103.
- 41 Wong, op. cit., 2008, p. 83.
- 42 Goodman, L. M. (1981). *Death and Creative Life: Conversations with Prominent Artists and Scientists*, New York: Springer 参照。
- 43 Wong, op. cit., 2000, p. 31.
- 44 Reker and Wong, op. cit., 1988, p. 233.
- 45 Ebersole, P., Types and Depth of Written Life Meanings. In Wong, P. T. P. and P. S. Fry (eds.), *The Human Quest for Meaning: A Handbook of Psychological Research and Clinical Applications* (pp. 179-191), Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates, 1998, p. 187. ヘルソールが意味の深淺を判断する基準として挙げるのは、その意味が個性的、複雑、具体的、真に迫るかどうかなどである。
- 46 Bauneister R. F., *Meanings of Life*, New York: Guilford, 1991, p. 185 及び Tomer, A., Eliason, G. T., Wong, P. T. P., Conclusion. In Tomer, A., Eliason, G. T. and Wong P. T. P. (eds.), *Existential and Spiritual Issues in Death Attitudes* (pp. 439-444), New York: Lawrence Erlbaum, 2008, p. 443 参照。
- 47 Wong, P. T. P., op. cit., 1989, p. 522.
- 48 ウォング、レーカーとゲサーが開発した「死に対する態度のプロファイル——改訂版——」(Death Attitude Profile-Revised) では、「亡くなったら、自分は天国へ行くと信じる」、「天国はこの世よりはるかによい場所だと信じる」、「死とは神との合いであり、永遠な幸福である」などの項目が死への接近態度の評価基準となっており (Wong, Reker and Gesser, op. cit., 1994)。
- 49 Micklej, J. R., Pargament, K. I., Brant, C. R., and Hipp, K. M., God and the Search for Meaning among Hospice Caregivers, *Hospice Journal*, 13, pp. 1-18, 1998.
- 50 Ano and Vasconcelles, op. cit., 2005.

Religion and Death in Recent Psychological Theory: Meaning Management Theory

Ilja Musulin

Meaning Management Theory (MMT) is an existential psychological theory of human motivation advocated by the clinical psychologist and priest Paul T. P. Wong and his colleagues.

The theory, inspired by the thought of the Viennese psychologist Viktor Frankl and centering on meaning, has largely been defined and presented in opposition to the Terror Management Theory (TMT).

This paper attempts to critically assess MMT's contribution to the psychological study of religion and to thanatology by analyzing its concept of religion and its notions of death and good living.

The paper finds that MMT tends to overemphasize mental benefits of the pursuit of meaning and religious belief and does not pay sufficient attention to empirical studies and opinions that suggest the existence of negative elements and effects, such as that excessive search for, or attachment to, meaning may lead to negative affect states, intolerance and violence, or that religious belief itself can bring about a crisis of meaning and anxiety. MMT's perspective on death attitudes and ways to deal with death anxiety is comprehensive and shows depth, and its criticism of TMT mostly useful. However, the theory, by defining approach attitude to death largely in terms of belief in an afterlife of reward and designating that attitude as the most positive way of facing mortality, shows a Christian bias in its

thinking on death and life.

The paper concludes that, although MMT has value as a philosophy of life and a counseling method that deals with existential issues, especially in the North American Christian context, its concept of religion is too heavily imbued with theological hues for it to be a valid general theory of religion and meaning. Its tendency to make value judgments regarding meaning and religious belief and promote a specific, Christian Protestant, worldview, places it in the field of religious psychology rather than scientific psychology of religion. To overcome the lack of scientific rigor reflected in its essentialist concept of religion as an inborn, often unconscious desire to believe in (a single) God, normativity and subjectivity in proposing true meaning and ideal life style, and to achieve a more universally acceptable scholarly account of religion and its relation to death, the MMT would have to tone down its Christian bias, show true understanding for religious diversity by incorporating non-Christian views in its theorizing, and conduct more empirical research regarding death anxiety, meaning and religious belief.